



噫 阿部青鞋

三橋敏雄

【武蔵野抄】より、

昼の霜おなじさびしき明日あらむ
冬ぞらへわが家の微塵のほりゆく
われ笑ふ妻笑ふ同じことならず
冬の川ひりひりひりと流れたり
耳たぶより砂がこぼれし幼な夜や
酒に似る松林の香は淋しいかな
雨ひとつたしかに落ちし葱畑
人を帰し葡萄の種を畳に踏む
十月の遠くより移転通知がくる
杉さむしかかる気圧をわれ愛す

【火門集】より、

鼻の目にいつばいの月夜かな
馬の目にたてがみとどく寒さかな
砂浜が次郎次郎と呼ばれけり
むづかしき顔してあるく暑さかな
少年が少女に砂を嗅がしむる
昼火花やがてころを損じけり
べとべとのつめたい写真館があり
日光にかくれて見えす雪山は
螢ひとつ穴のあくほど迫りくる
地にとまることを覚えし蜻蛉かな
半円をかきおそろしくなりぬ
物を読むごとくに靴の裏を見る
永遠はコンクリートを混ぜる音か
寒鮎のどれこれとなく血がにじむ
赤蟻の密集日暮まで続く
はりがねの最も苦痛なるかたち
虹自身時間はあると思いきり
いまぞ岩に導火は走りこみしかな
はずかしいことではないか赤ん坊
噴水を上げて不幸な首都があり
青年と気持のわるい握手をする
下に人がいるので貨車は動かない
干葡萄つまりしびんを見てなげく
人間の皮膚より寒いものはなく
右手より固いくるみをうみおとす
砂ほれば肉の如くにぬれて居り
つつたつている憂鬱な沙干狩
すこしの血はたらきて飛ぶ寒雀
あたたかいのどを鏡にうつしてみる

【続・火門集】より、

ひかりるる薄のくらき月夜かな
春の雪掃けば鐵石より重し
日が暮れてつめたくなるや春の泥
雪溪の写真の匂ひ嗅ぎにけり
濃くなりし銀河のことを言ひそびれ
どんぐりをいくつも拾ふなさけなき

【ひとるたま】より、

大野火の中より誰か燃えきたる
この国の言葉によりて花ぐもり
想像がそつくり一つ棄ててある
横たわる葡萄の房はくやしかり
くさめして我はふたりに分れけり
或るときは洗ひざらしの蝶がとぶ
正直に花火の殻が落ちてゐる
我々のごとくに雁が帰りゆく
れんこんの穴もたしかに噛んで食べ
肉体は何の葉ならむ夏終はる
おそろしき時はおそろし秋の風
読みたしと思ふびしよぬれの新聞紙
うつぶせになればいまだに若きわれ
聖堂へ嘔吐のやうな虹が出る
巨き肉懸けて肉屋はなぜかくす
最後まで暗くなりゆく春の暮
啓蟄のそとから家のなかを見る
黒揚羽部屋のなかにて休みけり
蜂蜜をもらひてやがて減らしをり
望の月しばらく見ればしばらく経つ